

## 2. 2021年度 修士論文要旨 (学生番号順)

### 子どもの人と関わる力を育む保育者の効力感と集団の意義

学生番号 22430072 若田 美香

本論では、子どもの人と関わる力を育む保育者の効力感の向上を目指し、保育者の協働性の意義に着目した支援プログラムの提案を行った。効力感は、保育に向き合う自信や見通しといった保育実践の基盤とも言え、客観的に数値化して分析することが可能であり、教育科学的見地から重要な意味を持ち得る。具体的には、プログラムの方向性を得るため、保育者に効力感向上に繋がる支援の認知を問う質問紙調査を実施し、SCATによる質的分析を行った。さらに、集団の認知と効力感向上に繋がる支援の認知の経験年数による違いを探るために、KHCoderによる量的分析を行った。それらの分析結果を基に、認知行動療法の知見及び構成的グループエンカウンター (SGE) の知見を2本柱としたプログラムを提案した。プログラムの特徴は、①認知行動療法の知見の援用により、具体的な行動目標を立て実践及び自己省察を促し自己コントロールに繋げる。②SGEの援用による支援関係の基盤作り、理解的な支援者によるフォローアップへの継続的支援、シェアリングによる認知の修正や拡大を図ることである。本支援プログラムは、協働性を活用することで効力感を高めるシナジー効果に働き掛け、真に保育者を支援し得るプログラムを目指している。

Keywords : 人と関わる力, 効力感, 保育者の集団, 協働性, 保育者支援

### 新卒採用変革期における大学キャリア形成支援の意義

— 環太平洋大学 OB/OG のインタビュー調査より —

学生番号 22501034 影山 映里

昨今、日本の労働市場において「新卒一括採用」は変化を遂げ、「終身雇用」・「年功序列」といった雇用慣行が実質機能を失っている。2000年以降、大卒者の早期離職を問題と捉えたキャリア教育の義務化により各大学がキャリアセンターを設置し、学生の長期キャリア形成支援に当たるべく取り組みを行っている。一方で「第二新卒」という労働市場が確立され、早期離職の捉え方や新卒採用は大きく変化を遂げている。また義務教育、中等教育において2020年以降、新学習指導要領が実施されており、教育の変化とともに大学キャリア形成支援の再構築の必要性が迫られていると考える。

本研究は岡山県にある私立大学の一つである環太平洋大学を研究フィールドとし、初期キャリア形成期にあるOB/OG15名へのインタビュー調査を実施した。「出口支援」にとどまることなく「早期に活躍出来る人材育成」をめざし、4年間を通してキャリア教育とキャリア形成支援を両輪で進めることが「キャリアの自律」を促す大学におけるキャリア形成支援の意義であるという実感を得た。一方で、研究結果はキャリア支援の再構築における仮説を得た事に留まっている。今後は仮説を検証する研究を継続し大学キャリア形成支援の在り方を他大学に発信する事で、VUCAの時代を生き抜くキャリア形成支援の在り方を提案していきたい。

Keywords : 新卒採用, キャリア教育, キャリア形成支援, OB/OG 追跡調査, キャリアの自律

# 伊予河野氏の諸領主編成から見る権力構造の変化

学生番号 22501043 堤 智章

戦国期権力研究において、大名権力が自立的な「戦国領主」をいかに編成したかが課題となっている。本稿で研究対象とする伊予河野氏は、奉書の奉者の変遷などから、16世紀の「天文伊予の乱」を画期として一族・譜代出身の領主中心から、国人領主出身の領主（戦国領主）中心の権力構造に変化したとされている。しかし、「天文伊予の乱」以前の権力構造や諸領主の性格の規定が不十分であり、一族・譜代出身の領主が戦国領主より河野氏権力への従属度が高いという前提は再検討の余地がある。

本稿では石手寺棟札に見える家臣等について分析した。その結果、15世紀段階ですでに、一族・譜代家臣でも独自に判物を発給するなど、一定の自立性を持った領主の存在が確認され（重見氏・垣生氏など）、彼らは奉者や「談衆」として河野氏の意味決定に関与していた。奉書の奉者になっていなくても「段銭奉行」や「談衆」として河野氏の支配体制の一端を担っている有力領主がいること、そもそも河野氏発給文書における奉書の割合は少ないことから、奉書の分析のみから河野氏の権力を評価できないことを指摘した。以上から、河野氏の権力構造の変化の画期は15世紀にあり、「天文伊予の乱」以後の変化は政権中枢の構成員の変化であると考えた。

教科書では織豊政権などを題材として歴史学習が進められることがあるが、河野氏のような地域権力を題材にした研究を授業に活用することで、歴史的事象を身近に感じるとともに、地域への興味や理解、課題意識を深めるような授業開発が進展すると考える。

Keywords : 歴史教育, 地域理解教育, 主権者教育, 教材開発, 戦国大名, 権力研究

# 創作ダンスの指導法に関する質的検討

— 熟練教師の実践における「行為の中の省察」に着目して —

学生番号 22501049 福武 幸世

本研究は、公立中学校で28年間ダンス教育に携わっている熟練教師O氏を対象に、創作ダンスの授業実践における省察(reflection)を分析し、個々の生徒の活動状況を捉えた実践的指導力の特徴を検討した。分析には、ドナルド・ショーンが提唱した「行為の中の省察(reflection in action)」に着目し、再生刺激法を採用した聞き取り調査を行い、M-GTAによる質的検討を行った。

分析の結果、教師の授業実践中の省察から、5つのコアカテゴリー【教師観】【中学生のダンスへの抵抗感】【ダンスの指導】【即時的な指導】【指導中の困難感】と、12のサブカテゴリーと44の概念が認められた。O氏の指導には、自主創造性教育を掲げるダンス教育と、規律や規範といった学校文化との狭間における葛藤がみられた。こうした葛藤の中で、体育科教師としての使命感を持ち、中学生の思春期特有の反抗的な態度への対処など様々な指導方略によって、誰一人とりこぼさない人間関係を重視した集団づくりを行っていることが明らかとなった。

教育科学の視点から考えると、本研究で浮き彫りとなったO氏の葛藤は、主体的・対話的で深い学びの視点に立った、授業改善が求められる今日の学校教育現場において、ダンスに限らず全教科に通じる課題ともいえる。学校教育現場の現状を明確に捉えた上で、教科の指導法や教材開発に取り組んでいくことが必要であると考えられた。

Keywords : 創作ダンス, ダンス指導, 熟練教師, 行為の中の省察, 実践的指導力

# アクティブラーニングを導入した日本語教育プログラムの 開発研究

— モンゴル人の日本語での発信力育成を目指して —

学生番号 22501070 ドルジスレン エンフゲレル

本研究は、モンゴル人の日本語を使った発信力の育成を目指すために、アクティブラーニングを導入した日本語教育プログラム開発をしようとするものである。現在の知識基盤社会では、知識の習得よりも、他者と協働して新たな知識を創り出すことや知識を活用することが求められている。そして、そのような資質を育成する方策としてアクティブラーニングが提唱された。しかし、現在、モンゴルにおける日本語授業はほとんど教師主体であり、会話の学習が不足しており、学習者は習得した知識を活用できていない。以上のような課題を克服するため、本研究では、アクティブラーニングを導入した日本語会話授業を実施し、これまで受動的に授業を受けて来た学習者が、アクティブラーニングを導入した授業を受けることによって、どのように変容するかを明らかにした。データの分析にあたっては、学習者がアクティブラーニングをどのように受け止め、それをどのように意義付けているかに焦点を当てた。これは、教育方法が学習者の学習に対する意識や態度にどのような変化をもたらすかを、教育科学によって明らかにしようとするものである。さらに、よりよい教育のあり方を探究するという点では実践的な意味を持つ研究となっている。

Keywords : アクティブラーニング, 主体性, 発信力, 対話的活動, 協働学習

## 中国の中学校における日本語学習の改善に関する一考察

— 学習方法を中心に —

学生番号 22501074 劉 斯コン

中国において、外国語学習が中国の中学校カリキュラム全体において重要な位置を占めている。そして、国際交流基金の調査によると、中国において近年日本語学習者数が増加している。また、大学入試（高考）において外国語の受験科目として日本語を選択する生徒が増加していること、及び日中関係の良化や訪日旅行のブームによって趣味や教養として日本語を学習する層が増加していることで、英語の代わりに、日本語は第一外国語として入試で中学生に選択されることが多くなっていた。だが、現在中国の中学校段階での日本語学習において、教師が一方向的に語彙と文法を教授し、教師と学生のやり取りが語彙と文法に関する質問や回答だけであるため、学生の学習意欲が低下するリスクがある。本研究は、中国の中学校における日本語学習の現状を明らかにし、中学校における日本語学習が抱える課題について検討する。中国の外国語学習に対して、その重要な一部としての日本語学習に着目し、中学生の日本語学習意欲を高めるために、中学校における日本語学習がこれからどのような改善をすればいいのかについて考察したい。

Keywords : 中学生の学習, 外国語学習, 日本語学習, 学習方法, アクティブラーニング

# 中学校美術科における「創造的思考」と「創造的態度」の 関係を基にした授業構成モデルの提案

— ブリコラージュ, ネガティブ・ケイパビリティを視点として —

学生番号 22502047 伊藤 慶孝

本研究の目的は、小学校図画工作科「造形遊びをする」に接続する中学校美術科の学習内容の必要性を明らかにし、これを踏まえ、中学校美術科における「創造的思考」と「創造的態度」の関係を基にした授業構成モデルを提案することである。筆者の実践の省察、「造形遊びをする」の先行研究と実践事例の考察等で得られた知見を、創造性の視点から整理し、「創造的思考」を「エンジニアリング」と「ブリコラージュ」、これを下支えする「創造的態度」を「ポジティブ・ケイパビリティ」と「ネガティブ・ケイパビリティ」として位置づけた。調査はこの「4つの思考・態度」の関係を基に作成した質問紙を用い、様々な領域、表現形式の題材において、学習者を対象に質問紙調査を実施し、教員にも質問調査をおこなった。その結果、「造形遊びをする」に接続すると位置づけられる中学校美術科の学習は、共通して「ブリコラージュ」と「ネガティブ・ケイパビリティ」の発揮を促す傾向にあることがわかり、他の領域、表現形式と相対的にみて、その必要性が明らかになった。また、調査結果と様々な領域、表現形式の題材における授業構成の傾向を基にグループ化し、特徴を抽出したところ、グループごとに授業構成における共通の視点があることがわかった。そこで、「4つの思考・態度」を基に作成した「創造モデル」と授業構成における共通の視点を照らし合わせ、授業構成モデルを提案した。本研究は、各教科の学習内容が学校教育の中で、どのような「創造的思考」と「創造的態度」の関係を発揮する傾向にあるかを相対的に位置づけることができる点において教育科学の視点から展開が期待できる。

Keywords : 創造性, ブリコラージュ, ネガティブ・ケイパビリティ, 造形遊びをする, 枠付け

# ICT を活用した読み書きに困難のある中学生の 効果的な家庭学習支援

— 漢字の家庭学習法の効果比較 —

学生番号 22502048 内田 佳那

本研究は、読み書きに困難のある中学生に対し、家庭学習における漢字学習アプリケーションの活用により、漢字の学習成績、学習意欲、学習負担にもたらす効果を検討することを目的とした。参加者間多層ベースラインデザインを用いて、紙プリントによる家庭学習条件（ベースライン期）と漢字学習アプリによる家庭学習条件（ICT介入期）の間で、漢字の読字・書字成績、宿題で取り組んだ漢字数、学習成果への期待感を比較した。また、宿題に時間がかかることが主訴であった1名に対しては、宿題時間についても比較した。本研究の結果から、ICT介入期では、読字・書字正答数の向上は3名全員、取り組んだ漢字数の増加と学習成果への期待感の向上は2名、宿題時間の減少は1名において認められた。これらの成果が得られた背景には、学習負担を軽減する解答形式や自動採点機能、テンポよく学習できる仕組み等の漢字アプリの学習要素が影響したと考えられた。一方で、アプリのどの学習要素が彼らの学びを支えたのかは、個々の認知特性や実態によって違いが生じると考えられ、一人ひとりに合わせたICT機器や機能等の丁寧なフィッティングの重要性が指摘できた。さらに、読み書き困難児の宿題の困難さにはさまざまな実態やその背景があることが明らかとなり、一律化した宿題の在り方を見直す必要性も示唆された。本研究は教育科学として、学校現場におけるICT活用の本格化という今日的な教育課題の解決の一助となったといえる。今後は、GIGAスクール端末の活用を含め、多様なニーズのある子どもを包摂できるような学習の仕組みを構築していく必要があるだろう。

Keywords : ICT, 読み書き困難, 漢字, 家庭学習, 中学生

# 二成分シグナル伝達系制御による新規抗菌剤開発

— キノン誘導体の合成と構造活性相関の調査 —

学生番号 22502050 奥村 太晟

1900年代の様々な抗菌薬開発により、細菌感染症の脅威は緩和されたが、現在でも多くの課題がある。特に深刻な問題は、病原菌の薬剤耐性（Antimicrobial Resistance：AMR）獲得であり、既存の抗菌薬が効力を示さない耐性菌が増加している。中でも“ESKAPE”（*Enterococcus faecium*：腸球菌、*Staphylococcus aureus*；黄色ブドウ球菌、*Klebsiella pneumoniae*：肺炎桿菌、*Acinetobacter baumannii*：アシネトバクター、*Pseudomonas aeruginosa*：緑膿菌、*Enterobacter species*：腸内細菌科細菌）と称される薬剤耐性菌に有効な治療薬の開発は急務となっている。一方で、新規抗菌薬の開発は1980年代以降では低迷傾向にあり、薬剤耐性菌に対する抗菌薬開発事業からは多くの企業が撤退している。本研究では、新たな作用機序として細菌のシグナル伝達である二成分制御系に注目し抗菌剤開発に取り組んでいる。結果として、高い抗菌活性およびHK阻害活性を示す誘導体を多数見出し、新規抗菌化合物ライブラリーの構築に成功した。2015年の世界保健総会では、AMRに関する「グローバル・アクション・プラン」が採択され、薬剤耐性が主要課題の一つとされた。現代社会で対応策が求められている課題に挑むことも含め、教育科学的な意義も大きい。

Keywords：抗菌剤開発，有機合成，薬剤耐性菌，二成分シグナル伝達系，HK阻害剤，社会的課題

# 探究に必要な資質能力を物理基礎で養うために必要な要素の研究

学生番号 22502051 尾崎 未登利

これからの時代には創造性が必要とされおり、創造性の涵養ができる教育が重視されている。本研究では、探究的な学びで問題を把握する過程を通常の授業の中で効果的に実現するために必要な要素を明らかにすることを目指した。

創造性を涵養することに効果がある探究に必要な資質・能力として、問題を把握して課題を設定する能力があげられる。問題を把握して課題を設定することを促す要素を見出すために、一筋縄には行かない課題を与え、生徒が混沌から問題を把握する状況を設定し授業実践を行った。生徒の状況を把握するために診断テスト、CLASS (Colorado Learning Attitudes about Science Survey)、単元テスト、OPP (One Page Portfolio)、全方位カメラによる授業記録を実施した。

問題を把握して課題を設定することを促す要素として、対話とモノが重要であることが示唆された。ここでいう対話では、生徒同士のたわいない発言も含め、いくつかの特徴のある会話の組み合わせが存在することが明らかになった。ここでいうモノは、思考のきっかけを生み出すもので、生徒が実際に触れる状態で提供すること、さらにその機能が明確に生徒に認識されている状態で提供することが必要である。本研究が探究的な学びを高等学校の授業に組み込む時の指針となることを期待している。

Keywords：創造性，探究，CLASS，対話，問題の把握

# Homeostatic mechanism underlying auditory perception: Expression and localization of a newly evolved sugar transporter in the cochlea

学生番号 22502052 荻田 奈穂

「聴覚」は、音源定位、音量、音質の識別など生物が生きる上で必要不可欠な感覚の一つとなる。WHOによると、高齢者人口の増大に伴い世界的に聴覚障害を呈する人が、2018年で推計約4億7000万人、2050年には9億人、に達すると予想され、日本では550万人を超えているとされる。哺乳類の聴覚器は、外耳・中耳・内耳から構成される。内耳蝸牛内には有毛細胞が備わり、音を電気信号に変換する機能を担う。内耳蝸牛管は前庭階・中央階・鼓室階に区画され、中央階を満たす内リンパ液は、細胞外液であるにもかかわらず生体内で唯一  $K^+$  が主要な陽イオンとなり、同時に外リンパ液に対して正の直流電位を示す。この特異な細胞外液の性質は音受容に必須であり、内耳組織はそれを維持するために生体内で最もエネルギー消費の高い組織の一つとされる。哺乳類においてこの内リンパ液の恒常性維持のために中心的な役割を担うのが蝸牛側壁に位置する血管条である。しかし、本組織におけるエネルギー供給機構の全貌は未だ解明されていない。そこで、本研究では哺乳類マウス内耳蝸牛管における新規糖輸送体の発現とその局在解析を行った。RT-PCR法、免疫組織化学法、および免疫電子顕微鏡法により、血管条を構成する辺縁細胞において新規糖輸送体の局在が確認され、本組織における新たな糖輸送経路の存在が示唆された。本研究の遂行により、聴覚機能再建に向けた新たな治療法の開発に繋がる可能性がある。近年、学校現場において、障害のある子どもと障害のない子どもが同じ環境の下でともに学び、共生社会を形成していこうとする取り組みが進められている。本研究結果が共生社会の実現に向けた一助となれば望外の喜びである。

Keywords : Inner ear, Glucose transporter, Marginal cell, Confocal laser microscopy,  
Immunoelectron microscopy

## 長宗我部氏の書札礼と家臣団構成

学生番号 22502053 北原 綾乃

書札礼は書体・文言・形式などに関する礼法のこと、差出・宛所の関係性によって文書形式などに反映されていた。多くの戦国大名権力は、戦国期に急速に勢力を拡大し、多数の領主が新たに配下となることで関係性が多様化した。また勢力の拡大に伴って身分が上昇することも多いため、相手との関係性が大きく変化し、今まで接点のなかった相手との関係も生じることとなり、よって書札礼をどうするのかという問題が発生すると考えられる。土佐国の戦国大名である長宗我部氏は、元親段階で急速に勢力をのびし土佐一国を越える勢力になった。ゆえに家臣との関係を整理、更新する必要があったと予想される。本研究では長宗我部氏の書札礼の特徴を分析するだけでなく、宛先の階層などを踏まえ書札礼が変化したかどうかを検証し、長宗我部氏の家臣団構成を明らかにする。このような視点で長宗我部氏の家臣団構成を解明することに、教育科学的意義があると考えられる。

長宗我部氏の書札礼は敬称に使い分けの基準が見られた。国親・元親では出自、家臣層など考慮した形式をとっているが、盛親以降は出自や家臣継続年数に関わらず統一化され、場合によって現状の家臣団状況を踏まえて厚礼形式をとるようになった。また厚礼形式をとられている者は『一宮再興人夫割帳』や『長宗我部地検帳』から階層が高いまたは知行高が多い傾向があり、書札礼の厚礼はある程度家格や知行高を反映していることが見えた。

Keywords : 長宗我部氏, 書札礼, 家臣団, 一宮再興人夫割帳, 長宗我部地検帳

# テーブルトーク・ロールプレイングゲーム(TRPG)による ASDのある児童生徒のコミュニケーションの変容と要因の検討

学生番号 22502054 木下 豪

ASDのある子どもは、他者とのコミュニケーション、対人関係においてさまざまな不適応や困難に直面することがある。ASDのある子どもが他者との積極的なコミュニケーションを継続して体験し、成功経験を蓄積できる機会として、余暇活動支援が挙げられる。教育科学にとって、学校教育の場に限定されない支援の在り方を積極的に開拓する点で、余暇活動支援を研究する意義は大きい。

本研究では、テーブルトーク・ロールプレイングゲーム(TRPG)を用いた余暇活動の実施が、ASD児同士のコミュニケーションの活性化にもたらす影響について検証した。TRPGは、紙、鉛筆、サイコロなどを用いて、参加者同士の会話によって架空の物語を展開するアナログゲームである。

本研究は、2つの研究によって構成される。研究1では、ASDあるいはADHDのある小学生3名を対象に、TRPGを用いた余暇活動を実施した。活動参加中の発話をもとに参加児同士の会話を分析した結果、参加児の発話量が増加し、発話対象者が多様化した。研究2では、ASDあるいは広汎性発達障害のある小中学生4名を対象に、Zoomを利用したオンライン形式でTRPGを用いた余暇活動を実施した。その結果、参加児の発話や参加児間のやりとりから、他児の積極的な遊び方の工夫を発見し、それを取り入れながら楽しむ様子が観察された。その背景には、TRPGがもつ「柔らかい枠組み」によって、遊びの自由度が高い特徴が影響していると考えられた。TRPG活動は、ASD児にとって、遊びながらにして他者とのコミュニケーションの機会を得られ、成功経験を蓄積するための活動となる可能性が示唆された。

Keywords : 余暇活動支援, ASD, テーブルトーク・ロールプレイングゲーム, コミュニケーション

## Microtubule dynamics in Heliozoa:

### Phylogenetic and morphological analysis of six heliozoan species from west Japan

学生番号 22502055 黒川 美樹

原生生物は単細胞性の真核生物と定義される。培養の簡便さと生きたまま顕微鏡観察が可能であることから、小学校から高校を含めた理科・生命領域の学習内容に必ず含まれる代表的な生物試料となる。例えば、ゾウリムシは細胞構造、繊毛運動、接合、体細胞分裂、行動解析、アメーバは細胞運動、原形質流動、体細胞分裂等、生命領域の様々な単元で利用可能な実験・観察法が提唱されている。原生生物は系統分類的・形態学的に多様であり、種特異的にユニークな特徴を有することから、生命現象を理解するための身近な教材として児童・生徒に興味を喚起させる可能性を秘めている。本研究では、西日本で採集した6種の原生生物太陽虫に着目し、その分子系統学的・形態学的解析を行った。太陽虫は、微小管束を内包した軸足と呼ばれる仮足を細胞体から放射状に伸ばす形態を持つ原生生物の総称である。本生物群は淡水から海水域に広く生息し、他の原生生物を積極的に捕食するため、水圏生態系の維持に重要な役割を果たすとされる。これまで太陽虫の種の多様性は世界各地で認められているが、日本におけるそれはほとんど報告がない。加えて、太陽虫の軸足は外部刺激に反応してユニークな細胞運動を示すため、新規の微小管系細胞運動機構が内在する可能性が高い。微小管をコードする遺伝子はハウスキーピング遺伝子とも呼ばれ、我々ヒトを含めたあらゆる生物に保存される極めて重要な生体分子の一つである。本研究は、日本に生息する太陽虫の系統進化を明らかにし、各種の細胞運動系を明らかにした初めての報告となる。本研究の遂行は、理科・生命領域における生態系の観察や生細胞の微小管動態を観察可能とする生物試料としてその教材開発も期待される。

Keywords : Protists, 18S rDNA, Actin, Tubulin, Immunocytochemistry, RNAi

# 製図から抽出した 3D データの AR・VR 技術活用に関する研究

学生番号 22502056 近藤 孝俊

技術科の教師は、授業時数が減少している中で材料と加工の技術、生物育成の技術、エネルギー変換の技術、情報の技術を指導する必要がある。材料と加工の技術の授業では生徒に製作を行わせることだけが目的ではなく、ものづくりを通して生徒の問題解決能力を高めることが大切である。そのためには設計、製作、完成後の各段階において評価を行い、問題点があれば修正・改善していく機会が不可欠である。限られた授業時数の中で、生徒に実践的・体験的な学習活動から知識や技能、よりよい生活や持続可能な社会を構築する資質・能力を育成することが教師に求められている。

近年、AR (拡張現実)、VR (仮想現実) 等のデジタル技術が様々な場面で利用されており、教育現場でもタブレット端末を用いた新たな授業展開が求められている。そこで本研究の目的は、デジタル技術を活用した支援教具によって、技術科が直面している問題を解決することである。開発した支援教具は生徒が引いた製図から構想した製作品の各部材を3Dオブジェクトとしてデジタル化するアプリケーションである。AR・VR技術を用いることにより生徒の構想を具現化し、その問題点や改善点に気付かせる。設計の段階で生徒が早期に問題点や改善点に気付くことによって小さなPDCAサイクルを発生させ、生徒の問題解決能力を高めていくことができると考える。

Keywords : 技術科教育, 製図, アプリケーション, AR (拡張現実), VR (仮想現実)

# 二成分シグナル伝達系制御による新規抗菌剤開発

— AI を利用した分子設計と構造活性相関の調査 —

学生番号 22502058 田淵 優奈

近年世界的に細菌の薬剤耐性 (AMR) が問題となっており、既存の抗菌薬での治療が困難な細菌感染症が増えている。近い将来、有効な抗菌薬が少なかった 1950 年以前の感染症脅威の時代が再来するとも言われている。本研究ではこの課題解決を視野に、医薬品候補化合物探索・設計シミュレーション技術 AI-AAM, 及び有機合成技術を用いて新規抗菌剤開発を行った。人工知能を利用した新技術 AI-AAM は、従来の方法とは異なるシステムでの候補化合物探索が可能であり、この技術が確立されれば、医薬品開発における AI 活用促進だけでなく、停滞している新規抗菌剤開発についても貢献は大きいと考えられる。本研究は、そのモデルケースとなり得る研究でもあり、異分野連携プロジェクトとして進められていることも含め、教育科学的意義は大きい。筆者はこの技術を活用し、細菌の二成分シグナル伝達系 (TCS) を標的とした新規抗菌化合物について分子設計を行い、誘導体の合成を行った。合成化合物の生物活性評価の結果、高い抗菌活性、及び標的酵素 (ヒスチジンキナーゼ) の阻害活性を有する誘導体が見出された。

Keywords : 薬剤耐性菌, 抗菌剤開発, 有機合成, 二成分シグナル伝達系, AI 活用

# 日本のポストフェミニズム的状况における、主婦の位置づけ

学生番号 22502059 戸田 実咲

本稿では日本のポストフェミニズム的状况の中で、主婦の位置づけはどうか、またそこにはどのような問題が存在しているのかについて検討した。日本でも英米同様ポストフェミニズム的状况により、ネオリベリズムを基盤とした個人主義的な「理想の女性像」が称揚されるようになり、主婦の理想像に関しても同様に、「カリスマ主婦」のようなポストフェミニズム的状况に即した価値観が見いだされるようになった。しかし、日本のポストフェミニズム的状况の特殊性として、「国家なるもの」によってその状況が促進されていること、そしてすべての女性の背景に良妻賢母イデオロギーが一貫して存在することが本稿の検討により明らかになった。そのため、一見「新しい主婦」のような形へと変化したように見える主婦の位置づけであるが、実際は、抑圧的な構造を再生産し続けており、また、そのことが隠され、より見えにくくなっているというのが、現在の主婦の抱える問題である。そこで、バトラーの提示する構築主義的視点により、本質的で自然と思われていた普遍的基盤に基づく社会構造を問い直し、さらにインターセクショナルに多様な家族の形態を増殖させていくことで、新たな主婦/夫の形を見出せるのではないかと思われる。この問い直しに対して教育がもつ意味は大きく、構築主義的視点による教育は、意識からの脱構築という意味で大きな可能性をもつものである。こうした観点から本研究は、他領域にまたがる、教育科学の基盤となるべき新しい視座を提示できるのではないかと期待できる。

Keywords : ポストフェミニズム, 主婦論争, 良妻賢母, ジェンダー・トラブル, シャドウ・ワーク

## 感覚体験や身体運動が創造性に及ぼす影響

— 感覚間相互作用による生徒の創造性を育むカリキュラムの検討 —

学生番号 22502060 西澤 智子

人間の感覚や身体運動は創造性とどのように関係しているのだろうか。本研究は、社会環境の変化が激しい状況下において、新しい価値を生み出すために必要な創造性を培うために、人間の感覚や身体運動を用いた手法について実証研究するものである。本調査では、全国の小学校・中学校・高等学校に在籍する生徒（1,223名）による3,026作品のデータから身体運動が創造性や表現活動に及ぼす影響について量的研究と質的研究の2つの側面から調査を行った。調査方法については創造性研究の第一人者であるGuilfordやTorranceの先行研究を基盤に、現在も改訂が重ねられている創造力測定テスト（Torrance Test of Creative Thinking/TTCT）を参考にした非言語的課題と言語的課題を作成した。そして創造性をトレーニングする題材として授業の中で実施し、創造性の発達段階における傾向や身体の動きと創造性の関係について調査した。その結果、表現活動を行う際、感覚への刺激や身体運動を取り入れることが生徒の表現活動を活性化させたり、身体への刺激がアイデア発想の新たな価値の創出に繋がったりすることが明らかになった。身体と表現活動の有効な相関を見出すことで将来の未解決な問題に対して、自ら思考し、他者と協働しながら創造的に問題を解決しようとする資質の向上を目指すこと、またそれを実現するための手法や授業形態の在り方を検討し、カリキュラムの構築を目指した。

Keywords : 創造性, 創造的思考, 創造性教育, 探究学習

# 幕末期の民衆と情報

学生番号 22502061 西田 誠

幕末期は豪農商層を中心に、政治的な情報を収集した風説留が作成され、これが「公論」世界成立の端緒と評価されている。一方、この時期には、豪農商層と小前層を含む一般民衆の間で情報コミュニケーションが分裂したとされている。仮に分裂があるとすれば、そこで形成される「公論」世界との質が問題となるが、一般民衆の情報意識は十分な分析がされていない。

そこで本研究では一般民衆が接した情報として、噂・風聞などに着目する。駿河国大宮町で酒造を営む榊屋弥兵衛の残した『袖日記』と、上野国横尾村で医業を営む高橋景作の残した『高橋景作日記』に見られる噂・風聞の内容を分析すると、日常的な話題など、生活に直結した噂が多く、幕府情報や異国船情報も生活との関わりから関心が持たれていたが、ペリー来航を契機に、生活に直接影響のない遠方の噂・風聞が多く流布した。こうした噂は荒唐無稽なものも多いため、噂の真偽を検証しうる政治的中間層と一般民衆ではリテラシーに差があるが、生活に直結しない情報への関心という点で一致している。また、弥兵衛と景作は常に一般民衆よりも情報を多く入手出来ておらず、緩やかな段階的変化をしていたと評価できる。このように豪農商層と一般民衆の情報意識は、情報環境に差異はありつつ、同方向を向き、「公論」世界を形成していた。本研究は教育科学の観点から見ると歴史授業における引用史料を一般民衆までに広げ、自分達に近い境遇への興味関心から、児童生徒の深い学びを引き出す事を可能にする点に意義があると考えられる。

Keywords : 歴史教育, 民衆, 史料調査, 幕末, 公論, 情報

## マイクログラビティ探査より検出された埋没地形を考慮した 菊川低地における完新世の地形発達史と地殻変動

学生番号 22502062 西山 弘祥

遠州灘東部に位置する菊川低地は、複数の浜堤が発達する浜堤列平野である。また、南海トラフ沿いに位置し、繰り返し生じてきた地震による地殻変動を受けている。一方で、平野の発達史に関しては十分な見解が得られておらず、地形発達を論じる上では、古地形を復元し、地殻変動量を定量的に明らかにする必要がある。本発表では、菊川低地南部で実施した重力探査の解析結果を報告するとともに、浜堤・砂丘上で採取したコア堆積物の層相より地殻変動量を見積り、それらを踏まえた上で菊川低地の形成過程を論じる。

重力探査結果を牧野・遠藤（1999）によるF-H相関法を用い、残差重力図を作成した。既存のボーリングデータを用い、残差重力値と基盤深度の関係を導出し、2本の埋没谷とその間に広がる埋没段丘面などの古地形を復元した。コア堆積物の層相より得られた海成層上限高度とその年代測定結果より、菊川低地における平均的な地殻変動量は1.60mm/yrと推定された。地殻変動量を更新世から完新世まで一定と仮定すると、菊川の埋没段丘面はMIS3（約45,000～40,000年前）間に形成され、埋没谷はMIS2（約20,000年前）に形成されたと推定できる。その後、菊川低地では約12,000年前に海水の流入が始まり、約8,000年前に陸地のほとんどが海に没する。砂州の閉塞は、埋没地形の影響を受けて西北西・東南東にむけて、約8,000年前に始まり、約5,600年前に閉塞が完了したことが明らかになった。

本研究の教育科学との関係性は地理的教育の中での防災教育に役立てることができる。

Keywords : 地殻変動, 南海トラフ地震, 重力異常, 地形発達史, 沖積平野, 菊川

# 大学生を対象とした就学時期におけるセクシュアルハラスメント及び ジェンダーハラスメントの被害経験に関する実態調査

学生番号 22502063 野田 夕月奈

児童生徒の健全な発達を阻害する一要因として就学時期のセクシュアルハラスメント(以下, SH)及びジェンダーハラスメント(以下, GH)がある。本研究の目的は SH 及び GH が就学の時期にどの程度発生していたかを明らかにすることである。大学生及び大学院生 442 人に就学時期における SH 及び GH 被害経験を尋ねたところ、「男(女)のくせに」と言われた経験があるのは 7 割、体型や容姿について発言された経験を有しているのは 6 割を超えていることが明らかになった。また, SH 被害は同級生が, GH 被害は父母や家族・親戚が行為者となっているケースが多いことがわかった。これらのことから, 授業等を通して児童生徒に性やジェンダーに関する正しい知識と認識を伝えていく必要があると考えた。また, 「性的経験を尋ねられた」や「胸や腰, 脚など身体に接触された」など, 少数ながら教師が行為者となっているケースがあり, 早急な改善が求められる。研修や職員会議等, 改めて児童生徒への SH について学ぶ機会を設け, 児童生徒が健全な発達と学習を保障する場としての「学校」を意識した校内環境, 組織整備を行っていく必要がある。今まで研究対象として扱われにくかった就学時期の SH 及び GH の実態を把握し, SH 及び GH の根絶を訴える取り組みにつなげることは, 健全で安全な学校環境づくりに寄与し, 教育科学の発展に貢献することができる。本研究の限界として大学生及び大学院生を対象としたことにより, サンプルにバイアスがかかっている可能性がある。今後の研究では, 高校生以下の児童生徒を対象として調査を行いたい。

**Keywords :** セクシュアルハラスメント, ジェンダーハラスメント, ジェンダーステレオタイプ, 性被害, 性教育

## 18 歳成人時代におけるユニバーサル・アプローチの視点 によるノンフォーマル教育の有用性に関する実証的研究

学生番号 22502064 野村 泰介

2015 年に成立した「18 歳選挙権」, 2022 年 4 月から成人年齢が 18 歳に引き下げなど「18 歳で大人になる社会」が目の前まで迫っている。本研究では, 青少年教育の歴史的変遷とその特質を検討したうえで, 「新成人期」前半の高校生にとってユースワーク参加がどのような意味を持つかを明らかにする。その際, ノンフォーマル教育の場としてユースワークを位置づけ, 全ての青少年を対象に自発性, 社会性の発達を促すというユニバーサル・アプローチの視点から考察をすることで, ユースワークの有用性を明らかにしていく。

現在, 大人になるための教育方法のひとつとしてユニバーサル・アプローチによるユースワークの拡充が有用であるとされ, 制度論, 組織論では十分な研究成果が蓄積されているが, 学習者の成長に関する研究が少なく, その有用性の分析・考察が不十分である。そこで, 実際にユニバーサル・アプローチ視点でのノンフォーマル教育を経験した高校生世代へのインタビュー調査を行い, 分析することで従来の研究での不足を補うこととする。具体的には岡山県岡山市を拠点に「学校の枠を超えた自主活動組織」としてユニバーサル・アプローチの視点でノンフォーマル教育の場を提供している「#おかやま JKnote」に参画経験のある現役高校生 5 名を調査対象として, インタビュー調査を行い, 参画したことによる個人の意識変容およびメンバー間の相互関係を分析する。

**Keywords :** 18 歳成人, 新成人期, 自立, 仲間, ユニバーサル・アプローチ, ユースワーク

# 教職志望度を高める教育実習での体験について

— 教師効力感を中心に —

学生番号 22502065 林 玲奈

同じ教育実習を経験しても、教職を志望する学生と志望しない学生がいる。それは、学生が経験した教育実習の質の違いによるのではなかろうか。そこで、本研究では、教職志望の有無で教師効力感に差がみられるのか、教育実習での体験（教育実習体験得点、被サポート体験得点）が教師効力感に影響を与え、教職志望に影響を与えるのかを検討した。分析の結果、教職志望の有無で教師効力感に差は見られなかった。教職志望は教育実習での体験の質で異なった。教職志望者の割合が高い群では、教育実習体験得点の「授業での成功体験」は「学級管理・運営効力感」に、被サポート体験得点の「学生同士の協力」は「学級管理・運営効力感」、「授業・指導効力感」につながった。他方、教職志望者の割合が低い群では、教育実習体験得点の「授業での成功体験」は「授業・指導効力感」に、「子どもとの親和体験」は「学級管理・運営効力感」につながった。さらに、被サポート体験得点の「協働的な雰囲気」は「子ども理解・関係形成効力感」につながった。本研究から、教職志望の有無に関らず、教育実習は学生の教師効力感を高めることが示唆された。他方で質的には差がみられ、教職志望者の多い群のみ、納得のいく授業を行う体験、学生同士で協力する体験が授業に集中できる学級集団をつくる自信や指導力に対する自信につながるということがわかった。

Keywords : 教育実習, 教育学部, 教師効力感, 教育実習体験, 被サポート体験

# 大学生の主観的幸福感に関わる要因について

— マインドフルネス, 本来感, エンゲージメントの関わりを中心に —

学生番号 22502066 原田 実季

本研究では大学生の主観的幸福感に関わる要因について検討した。幸福感について科学的に検証することは、教育にとっても意義のある取り組みであろう。島井・大竹・宇津木・池見・リュボミアスキー(2004)が提唱した主観的幸福感とは、どのような状況下であっても幸福であり続ける人々の特徴を明らかにしようとするものだ。原田(2020)では、本来感、スクール・エンゲージメント(以下、S・EG)について、主観的幸福感との関係を検討した。本研究はその発展として、主に次の2点を取り上げた。

1点目、大学生活に積極的に関与すること(EG)によって、自分らしくある感覚(本来感)が高まり、その本来感が主観的幸福感を高めるとい関係性が見られるかどうか検討した。2点目、主観的幸福感を支える要因(本来感, EG)について、今この瞬間に集中したり、自身をありのまま受容したりすること(マインドフルネス; 以下, MF)が重要であると考え、これについて検討した。調査は2021年6月、大学生164名に無記名の質問紙調査を実施した。

Keywords : 主観的幸福感, マインドフルネス, 本来感, エンゲージメント, 大学生

# 通信制高校における SST 導入と実践に向けた支援過程の分析

— 個別カウンセリングからグループ SST の導入・実践までを中心に —

学生番号 22502067 樋口 亜希

本研究は、対人関係に困難、不安を抱える通信制高校の生徒 8 名（1 年生 6 名，2 年生 2 名）に対し、グループ SST の導入・実践に向けた支援過程の分析を行なった。高校生に対する SST の実践研究の多くは、全日制、定時制高校の生徒を対象とした実践報告が殆どであった。本研究では、グループ SST 参加までに配慮が必要な通信制高校の生徒に対する取り組みとして、1) SST 導入までの土台・環境づくり、2) 通信制高校の生徒に適した SST の内容の検討と実践を行なった。その結果、入学前の面談を実施することにより、生徒・保護者の不安軽減がなされることや、個別カウンセリングの実施からスモールステップでの参加人数の拡大とグループ活動への展開の重要性が考えられた。それらの配慮や工夫は、生徒にとって「安心できる場」となり、集団での SST（集団で過ごせること）が可能となることが示唆された。

本研究は、通信制高校の生徒数が年々増加傾向にある時代において、生徒たちの対人関係の困難さに向き合った数少ない実践であった。本研究の実践は、教育科学としても、通信制高校の在籍数が増えている教育的課題に対して重要な意味をもつものであったと考えられた。すなわち、本研究は生きにくさを感じている多くの若者たちを支えるための実践となったといえる。

**Keywords :** 通信制高校, 対人関係, 安心できる場, 個別カウンセリング, コミュニケーション, SST (ソーシャル・スキル・トレーニング)

## マイノリティの問題の扱いについての 高等学校教員の意識に関する質的調査研究

— 地歴公民科教員に対するインタビュー調査に基づいて —

学生番号 22502068 別木 萌果

本研究は、マイノリティに関する問題を、教師がどのように捉え、授業でどのように取り上げようとしているのかを、教師に対するインタビュー調査を通して明らかにしようとするものである。近年、マイノリティに対する社会的差別・格差が特に問題視されるようになってきている社会的状況となっている。このような状況をふまえるならば、学校の社会科系の授業において、これらの問題は積極的に取り上げられなければならないはずだが、その扱いは教師によって異なっており、必ずしも教育現場でこれらの問題が重要なトピックとして広く認識されているわけではない。マイノリティの問題について教師の認識の実態を解明し、授業での扱い方について示唆を与えるデータを提供することは、教育研究上の重要な課題となっている。

6 名の教師を調査した結果、マイノリティに関する学習に積極的な教師は「マイノリティになりうる生徒のための授業がしたい」という思いを持っており、その背景には教師自身のマイノリティ問題への当事者意識、生徒が当事者意識を持てる・持っているだろうという想定、そしてマイノリティになりうる生徒を支援したいと思う姿勢があった。また、トピックによっても扱いやすいトピック・扱いにくいトピックがある。在日外国人のトピックなど一部の生徒から差別発言が出る可能性のあるトピックや、教師も生徒も当事者意識を持っていない場合が多い障害者のトピックは扱われにくい現状があった。

**Keywords :** 社会科教育, 人権教育, マイノリティ, 多様性と包摂, 教師研究

# 学校教育における実作品を用いた鑑賞活動に関する一考察

学生番号 22502070 矢野 壮一郎

学校教育におけるICT環境の急速な整備や、美術関係のデジタルコンテンツの充実などにより、鑑賞教育でのデジタルデータの活用は増えている。一方、COVID-19感染拡大で、美術館等での実作品の鑑賞機会は減少している。こうした背景から、学校教育と美術館の連携でも、ICTを活用する機会が増え、いくと予測されるため、今後の美術館活用のあり方について検討する必要があると考えた。本研究では、質問紙調査で、実作品での鑑賞と、デジタルデータでの鑑賞との、作品の見方や感じ方の違いや教育効果などについて明らかにし、それぞれの特性を活かした学校と美術館の連携のあり方について提案することを目的とする。実践の省察、一般化は教育科学の理念に合致すると考える。

調査は、調査Ⅰと調査Ⅱの2通りを行った。調査Ⅰは、作品のデジタルデータを鑑賞した後、その作品の実物を美術館で鑑賞し、調査Ⅱは、実作品を美術館で鑑賞した後、その作品のデジタルデータを鑑賞する。これらの調査とその考察の結果、デジタルデータでの鑑賞の後に、実作品での鑑賞を行うと、鑑賞者は作品に対してポジティブな変化を感じる傾向にあることがわかった。また、インターネット上で公開されている美術館の収蔵作品のデジタルデータには、鑑賞活動に耐えるものがまだまだ少ないこともわかった。この背景には、著作権法による制約や美術館が美術館利用者の多少によって評価されることなどが挙げられる。こうした状況の改善は、学校教育や社会教育のためだけではなく、美術館の公共性をはじめ、その存立価値を高めるためにも重要な課題である。

Keywords : ICT, 鑑賞教育, 社会教育, 美術科教育, 美術館

## 潜在記憶を基盤とした語彙習得学習と総合的な英語力の関連

— 教育ビッグデータを活用した e-learning と GTEC・英検の得点のデータ解析 —

学生番号 22502071 山本 康裕

本研究の目的は、潜在記憶を基盤とし、教育ビッグデータを活用したe-learning「マイクロステップ・スタディ」による1日数分程度の見流すだけの英単語学習と、GTECと英検の得点として表される総合的な英語力がどの程度関連があるのかを実データにより推定・評価することであった。研究1では、マイクロステップ・スタディの学習量とGTEC得点との関連をマルチレベルモデルによって検討した結果、見流す程度の短時間での英単語学習であっても、総合的な英語力に対して実質的に効果を持つことを支持する結果が得られた。さらに、その学習効果は学習者の英語力の高低には依存しない可能性があることが示唆された。研究2では、マイクロステップ・スタディによる英単語学習が、総合的な英語力の向上に対して関連があるのかを厳密に判断するため、3時点の英検得点によって表される総合的な英語力の変化と、マイクロステップ・スタディの学習量との関連をマルチレベルモデルによって検討した。その結果、マイクロステップ・スタディによる英単語学習は、学習量に応じて即時的に総合的な英語力の向上に寄与するのではなく、長期に渡って学習効果は蓄積され、ある時点で総合的な英語力を加速的に向上させる可能性があることが示唆された。本研究は潜在記憶の知見が英語力の向上に適應できることを科学的に証明し、教育現場に対して直接的に意味のある知見を示すことができる点で、教育科学として重要な意味を持つと考えられる。

Keywords : 潜在記憶, マルチレベルモデル, 英語力, e-learning, 教育ビッグデータ

# 幼児造形教育における思考力の育成とその具現化への試論的検討

学生番号 22502072 横田 咲樹

本研究は、思考力育成の観点から、幼児期の造形活動について考察するものである。「Society5.0時代」や「予測困難な時代」の到来を背景に、思考力育成は近年、より重視される傾向にあるが、造形教育分野に着目すると、思考力育成に関する研究が少ない。特に、幼児造形教育の分野においては、研究が単発的で、議論の蓄積が望まれる。議論の深化・発展には、造形的思考力の育成を視点とした造形活動の捉え直しが必要であろう。そこで、4・5歳児学級の幼児を対象に、身体内部を描画する保育実践を行った。保育実践は、対象の保育施設の理事長及び園長の承認を得て行い、収集データを学術研究に使用することは、保護者の許諾を得ている。本研究成果は、造形的思考力に関する幼児の発達過程の一端が見出されたことである。幼児期の造形活動には、これまで見逃されてきた教育的意義があることが明らかになった。本研究は、保育実践によって収集したデータを分析した結果、幼児期の思考力育成について、保育の質の向上に資する結果を得られた点で、教育科学であると言える。今後の課題は、身体内部の描出以外の保育教材を検討すると同時に、平面的な描画活動ではなく、立体物を扱う造形活動を対象として造形的思考力の育成を考察することである。

Keywords : 幼児, 造形活動, 思考力, 描画, 身体内部

## Mechano-/Chemo-transduction systems in an acoel worm, *Praesagittifera naikaiensis*:

Three-dimensional observation of the epidermal sensory cell and  
its nervous system with immunohistochemical analysis

学生番号 22502073 渡邊 佳穂

環境問題は我々の生活と密接に関わっており、学校教育においても重要な教育内容の一つとなっている。指標に依っては既に「引き返し不能点 (point of no return)」を超えているとの指摘もあり、地球温暖化を含めた環境激変への対応は待った無し状況にある。我が国の将来を担う児童・生徒が、身近な自然環境の現状を理解し、その中から課題を見出し、解決法を模索しようとする一連の体験は、特に理科・生命領域で積極的に導入していくべき内容となる。環境問題を取り扱う場合、取り上げた課題に対して何を指標として評価を行うのが重要となる。例えば、水質や土壌、大気汚染について、その度合いを評価する際、指標生物を利用する。本研究では、汽水から海水域を網羅する新たな指標生物として、無腸動物*Praesagittifera naikaiensis*に着目した。本種は体長2 mm程度の海産性の小動物であり瀬戸内海の自然海岸に生息する。陸地に近い生息域であるため、雨水や河川の流入および天候の影響により塩分濃度や水温は激しく変化することが予想され、本種が極めて高い環境耐性能を有することが推察される。また本種は外部環境の変化に鋭敏に反応し、正の重力走性および光走性を示すことから、環境指標生物として有用であると考えられた。現在、本種の体表に位置する感覚毛に着目し、その刺激受容から神経系を介した効果器への伝達に至る一連の刺激受容応答機構の解明を目的として研究を進め、感覚毛の刺激受容に関与する分子機構の一端を明らかにしつつある。本研究の遂行により、本種の環境応答特性を指標としたこれまでに無い新しい環境水のモニタリング装置の開発が期待される。ひいては本種が持続可能な海洋環境を維持していくための極めて重要な指標生物となると考えている。

Keywords : Cilia, Microvilli, F-actin, Acoelomorpha, Global warming, Model organism

# 中国におけるジェンダーフリー教育のあり方に関する考察

— 日本と中国の小中学校教育カリキュラム構成の比較を中心として —

学生番号 22502074 王 鶴橋

本研究は、日中の小中学校のカリキュラム及び教科書におけるジェンダーフリーに関わる教育内容を考察対象とし、各国の小中段階におけるジェンダー教育の現状と課題を比較分析した。

学習指導要領および義務教育課程標準の分析結果から、両国とも異性愛を前提とし人間関係の構築を目的としていることを解明した。日本に比べて中国はジェンダーフリーの視点が欠如し、デ・ジェンダー化する特徴を有していた。両国の教科書の分析結果からは、日本に比べて中国ではカリキュラムに対応しておらず、性的少数者への配慮が欠如し、異性との交流を拘束・抑圧する傾向があり、性役割分担を強調するという特徴が見られた。最後に、中国の現行ジェンダーフリー教育の性的マイノリティの不可視化、「女らしさ」「男らしさ」の残存、受容共生能力の育成の「浮いた感じ」という課題を明らかにし、性的多様化の視点の向上、ジェンダーロールの見直しやジェンダーステレオタイプへの是正、差異受容能力に基づく尊重・平等意識の育成が必要であると指摘した。

教育科学との関係性については、ジェンダーにおける平等がSDGsの目標の一つとして世界中で重要視されており、教育科学研究の方向性を規定する本研究は重要な意味を持つと考えている。

**Keywords** : ジェンダーフリー教育, 日中比較, カリキュラム, 教科書, 小中学校, 学校教育

# 中国における法教育による紛争解決能力の育成

— 中学校「道徳と法治」の分析を手掛かりとして —

学生番号 22502075 賀 延松

本研究は、中国、中等公民系教科「道徳と法治」教材の分析を通して、現行法を活用して市民生活における紛争を解決する能力を育成する法教育のあり方を明らかにすることを目的とする。そのために、『義務教育思想品徳課程標準』（2011年版）と『青少年法治教育大綱』（2016年版）を踏まえて、中学校「道徳と法治」のすべての教科書の目次、単元構成、学習活動を整理し、その法教育の内容構成と授業構成を分析した。分析の結果、第一に、中学校「道徳と法治」法教育の特質は、法的知識の学習を通して法を認識させているだけでなく、法を守る意識を身に付け、法を生活に適用する共同体の一員も育成しようとしていることが明らかになった。このような法学習は現在の法の暗記になってしまうと指摘されていたが、具体的な学習活動や授業展開の分析から、中国の法教育では、探究学習などの学習活動を導入し、子どもが法とその価値理念について自主的に思考するように導いていることを解明した。第二は、中国における紛争解決能力の育成を目指す法教育には、個人や集団との衝突や紛争が起きた時に、法的プロセスを通して適切に自分の權益を守ったり、紛争を処置したりする公民的資質の育成に教育的な意義がある点である。今後の研究としては、教科書内容の分析に留まらず、「道徳と法治」教師が法教育カリキュラムを扱う実態、法教育の授業を受けている生徒の実態も明らかにしていきたい。

**Keywords** : 公民科, 道徳と法治, 法教育, カリキュラム

# 役員会における出身校ネットワークが企業業績に与える影響

学生番号 22502076 徐 涵

本研究の目的は役員会における出身校ネットワークが日本国内の金融機関の経営パフォーマンスに与える影響を実証的に明らかにすることである。そのために、役員属性に関する個人レベルのマイクロデータを用いて金融機関の役員会における出身校ネットワークのあり方を数量化し、それを他のコントロール変数とともに個別金融機関の経営パフォーマンス指標に回帰する。本研究の主要な分析結果は以下の通りである。いくつかの定式化において、役員会における出身校ネットワークのあり方は金融機関の経営パフォーマンスに有意な影響を与える。さらに、その限界効果は株式会社組織である銀行と協同組織である信用金庫のあいだで異なる。本研究の最大の貢献は、個人の学校歴が生み出す出身校ネットワークの経済価値を金融機関の経營業績の面から明らかにした点にある。

**Keywords** : 社会関係資本, コーポレートガバナンス, 金融機関, 出身校ネットワーク, 重回帰分析

# ベトナム社会主義共和国におけるインクルーシブ教育発展支援センターの充実方策

— 日本の特別支援学校のセンター的機能の応用 —

学生番号 22502077 ダオ ゴック ミン チャウ

本研究は比較教育学の観点を用い、日本の特別支援学校のセンター的機能とベトナムインクルーシブ教育発展支援センターの現状と課題を把握した上で、日本の仕組みを参考にし、ベトナムの支援センターを改善するための提案を提供することを目的とした。日本の特別支援学校のセンター的機能の現状と課題を把握するために、2013年から2020年までの文献を検討した。その結果、日本の特別支援学校における①地域の医療機関との連携、②地域へ相談・情報の提供、③通常学校の教員への支援、④通常学校の児童生徒への指導・支援の4点は、ベトナムにとって参考になる内容だと考えられる。その後、面接調査により、ベトナム支援センターの教員に支援センターの現状と日本の仕組みの導入可能性を伺った。検討した文献の内容と支援センターの教員の語りを踏まえ、著者は支援センターの充実方策を提案した。それは①地域の実態把握、②校内体制の整備、③地域に向ける研修、④カウンセリング機能の充実、⑤児童生徒のニーズに応じる設備提供、⑥自主的に地域における家庭、教員との連携、協力である。

**Keywords** : インクルーシブ教育, 比較教育, 特別支援学校, センター的機能, ベトナム, インクルーシブ教育発展支援センター

# モンゴルの小・中学校における特別支援教育コーディネーターの 導入可能性

— 日本の取り組みを参考に —

学生番号 22502078 ダムバ エンフザヤ

本研究では、日本の小・中学校における特別支援教育コーディネーターの取り組みに関する動向を把握したうえで、モンゴルの小・中学校への特別支援教育コーディネーターの導入可能性について究明することを目的とした。そして、モンゴルの通常学校の教員（3名）と知的障害特別学校の教員（1名）を対象に半構造化インタビュー調査を実施した。その結果、特別支援教育コーディネーターのような取り組みが求められているものの、その導入に当たって指名可能な人材の不足や人件費の確保が困難な状況が明らかになった。また、実践面において日本の特別支援教育コーディネーターが感じている「多忙さ」や「力量不足」等の困難に直面する可能性について言及された。しかし、学校現場における調整によってそれらの困難は改善することが可能である。このような現状を踏まえ、教職員の間でそれぞれの専門性および強みを発揮し、チームで取り組む役割分散型コーディネーターの形態が相応しいことが示唆された。最後に、特別な支援を要する児童生徒が質の高い学校生活のみならず、地域社会においても豊かな人生を送られるよう取り組むことが期待される役割分散型コーディネーターの実践モデルについて提示した。

**Keywords** : 特別支援教育コーディネーター, 導入可能性, モンゴル, 通常学校, 役割分散型,  
コーディネーター

## 日中台の小中学校における防災教育の差異・変化と現場の課題

学生番号 22502080 陳 侃

自然現象が人間社会に支障を生じさせると自然災害になる。その損失を最小限に抑えるのが防災・減災活動であり、防災教育によって人々の命を守ることはもちろん、社会全体の脆弱性を減らすことになる。日本、台湾、中国大陸では同じような被災経験があり、経験によって防災・減災に対する捉え方が変化している。その変化に伴って防災教育も変化途上にある。学校での防災教育は近年重視されているが、生徒たちには十分に伝達できないという事が指摘されている。そこで、本研究では防災教育の変化と十分に伝達できない要因について、日本、台湾、中国大陸における防災教育を比較し考える。

研究方法は、日本における平成元年から平成29年までの指導要領、指導要領解説書および教科書に現れる防災教育の記述の変化を検討し、台湾においては、最新の「十二年國民基本教育課程綱要」に求める防災教育を、中国大陸では課程標準および関連する最新の教科書の内容を整理した。次に各地域教員に対し、アンケートを行い、教育現場の教員の防災や防災教育に対する意識を把握した。

その結果、各教科での防災教育の特徴が明らかになった。日本の防災教育では、防災教育に関する記述が拡充され、生徒たちが考えたり、状況に応じて自分の取るべき行動を判断・行動したり、学習・指導する際の課題学習の重視などが、災害経験を経るたびに重視されてきたことがわかる。現行の中国大陸と台湾の防災教育では、日本の過去の時期と似ており追随していると推測する。一方では、現場の教員たちが防災教育の変化に対して、学習指導要領、教科書の研究より、研修、被災体験などが大きく影響していることがわかった。防災教育を担うことができる教員の育成には、教員の災害への意識を学修するための研修などが必要だと考えられる。

**Keywords** : 教科書, 指導要領, 教員, 防災教育

# Developing a lesson plan for fostering the problem solving skills of high school students:

Focusing on ethnic minorities' human rights and environmental issues

Student Number: 22502081 Nyein Su Hlaing

This study focuses on nurturing children to become democratic citizens especially the development of their problem solving skills on ethnic minorities' human rights and environmental issues. Taking responsibilities in tackling problems and being able to decide freely on public affairs are considered to be vital in the process of ensuring the democratic citizenship. Therefore fostering the problem solving skill is indispensable to a democratic society. Even though there are some academic research concerning developing the problem solving skills, it still needs to do some more research which can support the development of educational science. This study has five chapters: (1) introduction, (2) literature review, (3) research method and procedures, (4) research findings and discussion and (5) conclusion and suggestions. This study intends to develop high school students' problem solving skill and creates two-hour-long lesson plans: one is for ethnic minorities' human rights in education and another for environmental issues. And this study ensures to find out the ways not only to foster the problem solving skills but also to create better lesson plans for further research with the achievement of deeper understanding of the above mentioned problems.

Keywords: problem solving, ethnic minorities' human rights, environmental issues

## ESD としての環境教育における体験学習の意義と方法に関する研究

— 地域における環境学習指導者に対するインタビュー調査に基づいて —

学生番号 22502082 付 文婷

人間のライフスタイルの変化, 社会経済活動による地球規模での環境変動が顕著になっており, 環境問題が多様化, 深刻化している。このような環境問題を改善し, 持続可能な社会を構築するために, 環境教育の役割に対する新たな期待が高まっている。本論文は現在の環境教育が持続可能な開発のための教育 (ESD) へ転換していく中で, 重要な実践手法としての体験学習はどのような方向性を持っているのか, また, 環境教育主体としての市民団体の取り組みはどのような課題と将来の可能性があるのか, 各主体の運営者はどのような目標を持って, 活動を展開しているのかを明らかにしようとするものである。本研究では, 市民団体を中心に, 岡山県における環境教育主体を対象として, インタビュー調査を実施した。インタビューデータに基づいて, 環境活動の課題, 実施の際の大切な点と改善点, 具体的な取り組み内容を整理したうえで, 対象となるそれぞれの教育主体の方々が持っている体験学習観を明らかにした。調査により, 体験学習観は, 何を指すかによって, 感性を重視したもの, 自然の仕組みの理解を目指したもの, 知性を重視したもの, 持続可能な社会の形成を目指したものがああり, どの目標を重視するかによってアプローチが異なることが明らかになった。本研究は, 学校はもちろんのこと, 様々な社会教育の場でも行われている体験学習のあり方について, 教育科学の立場からその意義を解明しようとしたものであり, 環境など様々な領域の教育改善に役立ち, 学術的にも実践的にも意義あるものと考えられる。

Keywords : ESD, 環境教育, 自然体験, インタビュー調査, 市民団体

# マイクロステップ・スタディにゲーム性を加えた フィードバックシステムが学習意欲に与える影響

学生番号 22502083 文 翔

従来、教育工学の領域において、知識を「習得」するための自学自習教材として、eラーニングが活用されてきた。一方、高精度教育ビッグデータを活用したeラーニング（マイクロステップ・スタディ）により英単語等の知識を実力レベルで習得する支援の社会実装が全国に広がっている。eラーニングは個別に気軽に学習を行うことができる反面、学習者に強い自律性、長い期間にわたる学習意欲の維持が求められる。本研究はマイクロステップ・スタディの学習者の学習意欲を引き出すことを目指し、特にマイクロステップ・スタディの初期段階の利用度を向上させるためにゲーム要素を入れたeラーニング・フィードバックシステム「学習の森」を開発して導入し、その効果を検討した。その結果、「学習の森」によりマイクロステップ・スタディが中学生の「達成志向」、「自主的学習態度」、「継続性」という学習意欲にポジティブな影響を与えることが明らかになった。また、大学生を対象に対照実験を行った結果、学習の森によるフィードバックがマイクロステップ・スタディの学習量の増加と特性的自己効力感尺度の「遂行可能感」に有効に機能することが明らかになった。

**Keywords** : フィードバック, 学習意欲, eラーニング, ゲーム性, マイクロステップ・スタディ

## 外国人技能実習生の地域とのつながり構築における 日本語学習の意義

学生番号 22502084 Hoang Ngoc Bich Tran

本研究は、外国人技能実習生にとって日本語教育がどのような意味を持っているかを、実習を終えたベトナム人に対するインタビュー調査によって明らかにしようとするものである。そのうえで、日本語学習が技能実習生のコミュニティ参加を促し、市民性形成に寄与することを明らかにしたい。

この研究は、教育とコミュニティの関係を捉え直すもので、技能実習制度のあり方を見直すうえで重要な示唆を与えることが期待される。外国人技能実習生が直面している問題としては、地域社会に参加する市民を育成するための内容が組み込まれていないことによって、彼ら・彼女らのキャリア形成につながる学習が十分に保障されていないことが挙げられる。本研究では、まず、市民育成と日本語教育の関連について考察した先行研究を分析し、外国人が日本社会で各自の生き方を追求するにあたって、日本語教育がどのような役割を担うかを理論的に検討する。そのうえで、技能実習生の地域とのつながり構築に焦点を当て、その経験が彼ら・彼女らにとってどのような意味を持つか、日本語学習はそのためにどのように役立ったかをインタビュー調査を通して明らかにする。本研究の成果を踏まえて外国人技能実習生にとって望ましい日本語教育のあり方を提言することは、外国人技能実習生と共生する地域社会を作るための基盤を構築することにつながるだろう。

**Keywords** : 外国人技能実習生, 日本語教育, 市民性形成, 地域コミュニティ, キャリア形成

# 視覚情報（画像）が語彙習得に及ぼす影響

— マイクロステップ・スタディによる英単語学習での検討 —

学生番号 22502085 楊 碧瑩

現代の日本では、グローバル化の進行に伴い英語教育が重要視されている。その中、英語教育の基盤知識として、語彙習得を促す効率的な学習方法の提案、及びその効果の検証が求められていると考えられる。一方、高精度教育ビッグデータを活用した新型e-learning（マイクロステップ・スタディ）は、さまざまな教育現場に導入され、英語教育に少なからぬインパクトを与えている。その中、先行研究で提案されているPaivioによる二重符号化説と言語習得の関係性に関する研究によれば、単語を表現できる画像の活用が、語彙習得の効率を向上させる可能性が考えられた。本研究は、マイクロステップ・スタディが扱う英単語の学習コンテンツを充実させること、及び効率的な学習を提供するための基礎的なデータを収集するため、視覚情報（画像）の対提示が英語の語彙習得に与える影響を明らかにすることを目的とし、画像刺激の呈示の有無が語彙習得の成績と学習時間に与える影響を実験的に検討した。その結果、学習開始時から短期間で画像刺激の呈示が語彙習得の成績の向上に寄与する結果が示された。ただし、成績に天井効果が出たため、画像刺激の効果の持続に関しては明確な結論は示すことができなかった。また、画像条件の影響が学習時間にも見いだされた。語彙習得の効率性を検討する場合には、学習時間と成績の向上のバランスを考慮し検討しなければならない。画像条件下の学習効果のフィードバックが、自己効力感や学習意欲の向上に寄与する可能性もあり、それらの影響の検討も期待される。加えて、英単語難易度の設定、学習時画像の具体的な教示などをさらに吟味し、語彙習得の効率化をもたらすe-learningの実施ができるようシステムの改良を進めていくことなどが今後の課題となる。

Keywords : 英語教育, 語彙習得, マイクロステップ・スタディ, 二重符号化説, 画像優位性効果

# 学校外の機関によるキャリア教育デザインの研究

— 学校とのより良い連携を構築するための方法に焦点を当てて —

学生番号 22502086 頼 静雨

近年、情報技術の発達やグローバル化の進展により、子供たちをめぐる環境が大きく変化している。そのような状況において、キャリア教育の必要性が一層重視されるようになった。文部科学省は様々な施策を通して、キャリア教育を推進しているが、2020年の国立教育政策研究所の実態調査によって、学校が提供しているキャリア教育と子供が求めているキャリア教育には齟齬があることが明らかになった。特に高等学校の就業体験活動であるインターンシップに実際に参加した生徒の数は決して多くはない。以上のような状況をふまえると、高等学校の就業体験活動の活性化に役立つデータを提供できる実証的な研究が必要である。なかでも、近年、各地で見られるようになった地域と学校の連携、特に民間組織との連携に本研究では注目する。本研究では、キャリア教育支援団体であるワカモノートを研究対象とし、ワカモノートの活動に参加するとともに、インタビュー調査を行った。調査によって、地域と学校の連携の実態や、キャリア教育にかかわる人々の教育観を解明し、先に述べた課題の克服に貢献することを目指した。収集したデータを分析した結果、キャリア教育にかかわる民間組織の人々は、高校生の支援を、伴走者として見守るという形で行っていることが明らかになる一方で、その人たちの教育観は、自己実現の追求、価値観形成、コミュニケーション能力の向上など実に多様であることが明らかになった。本研究は、教育科学として、地域と学校の連携によって、社会に開かれた教育課程という教育政策の実現に寄与するものであると考えられる。

Keywords : キャリア教育, 地域と学校連携, 外部機関, インタビュー調査, 役割, 教育観

# 品格が well-being に及ぼす影響のメカニズムに関する研究

— 生活習慣を媒介要因に —

学生番号 22502087 李 明璐

本研究の目的は、子どもの品格が well-being に及ぼす影響のメカニズムに関して、生活習慣を媒介要因として検討を行うことであった。中国内モンゴルにある A 小学校 4-6 年生、総計 242 名が対象であった。分析の結果、4 つの品格（フェア・配慮、根気・誠実、勇気・工夫、寛大・感謝）と子どもの well-being（生活充実感・ホープ・学業自己効力感）との間に、睡眠・運動を整える習慣は確実に媒介することが明らかになった。子どもの品格はよい生活習慣を通して、well-being を高めることが示唆された。特に、学業自己効力感の向上に対して、品格は運動と睡眠のよい習慣づくりを介してポジティブな影響を及ぼすことが示唆された。品格教育の視点で、学業自己効力感の向上に今までと異なる方向性を示した。以上より、品格教育の仕方として、運動・睡眠のよい習慣づくりは新たに提案できる。これらの媒介要因は、教育現場で取り入れることで、関連する実践や教育効果が期待できる。今後の課題として、よい生活習慣における実際の教育効果の検証が望まれる。運動及び睡眠のよい習慣に関わる介入の構築、及び指導法のあり方に関して、更なる検討が必要だと考えられる。

Keywords : 品格, 生活習慣, well-being, 媒介, メカニズム

# 19 世紀におけるイギリス・中国・日本のコレラ流行とアヘン

学生番号 22502088 陸 若雨

本論文では、19 世紀におけるコレラ流行と、イギリス、中国、日本のアヘン使用に注目し、当時イギリス、中国、日本の医学書や医学雑誌をメイン史料として、英中日の三国ではコレラ治療にアヘンに対する認識が異なっていることを明らかにする。イギリスではアヘンは主にコレラを含む各種の疾病を治す万能薬として使用され、19 世紀後半には医学研究の進歩によって、下痢止めや鎮痛薬として使用されるようになった。一方、中国ではアヘンを吸う方法の伝来によって、アヘンは医薬品ではなく嗜好品と見なすように認識された。日本では、国家は医学用以外のアヘン輸入に対して厳禁の態度を表したものの、医薬品としてのアヘンは幕末時代に鎮痛・鎮痙薬として用いられ、明治初期に西洋医学の受容・普及に伴い、コレラ治療における下痢止めとして知られ、イギリスの考え方と一致するようになった。18 世紀以前の伝統医学に蓄積されたアヘンに関する知識を土台に、医学界は 19 世紀にコレラ治療を含む医学実践の中に医薬品としたアヘンに批判的な態度を表す一方、社会はアヘン中毒への認識が広まり、20 世紀初頭により本格的にアヘンが麻薬として定義されるようになった。今の歴史教育の中に、近代における新型疫病のパンデミックとそれを対抗するための知識の受容をコロナ時代の生徒に関心を持つことに貢献できる。

Keywords : コレラ, アヘン, 感染症, 蘭学, 近代史

# 中国における市民性教育実践に関する実証的研究

— 小学校低学年道徳授業における教師の発話に注目して —

学生番号 22502089 林 イク州

本研究は、中国の小学校道徳の授業を、教師の発話に着目して分析し、教師の授業に対する考え方や意図が発話とどのように関連しているかを明らかにしたうえで、中国の市民性教育の特質を明らかにしようとするものである。実際の授業の発話を記録したデータを、発話カテゴリー分析の手法を用いて検討し、調査対象となった教師の指導の特徴から、中国の市民性教育は何を目指し、教師はそれをどのように受け止めているかを明らかにしようとした。

調査対象とした小学校低学年は、大人の言葉や振る舞いを受け入れ、模倣する傾向が強い。いわば、身近にいる親や教師などの大人の習慣をまねて自らの道徳的規範を作っていく時期である。したがって、教師の発話の影響は、年齢が上の子供よりも大きいと考えられる。そのため、低学年の授業において発話分析を行い、教師の指導について実証的な調査をする意義は大きいと考えられる。

中国の道徳教育は、近年新設された「道徳と法治」という授業で行われている。本研究では、3名の「道徳と法治」担当教員を対象として、インタビュー調査と録画したそれらの教師の授業の分析を行った。授業記録の分析の方法は、授業中での教師の発話をカテゴリーごとに集計するというものである。調査の結果から、発話にみられる教師の指導の傾向とその意図やねらいには、一定の関連性があることや、教師の指導には共通する特徴がみられることなどを明らかにすることができ、教育科学研究として、中国の道徳指導の改善に寄与し得る一定の成果を得ることができた。

**Keywords** : 道徳教育, インタビュー調査, 発話カテゴリー, 教師研究, 道徳と法治